

龍野地区は、脇坂氏の約200年にわたる長い藩政を象徴する龍野城の城下町で、その起源は16世紀まで遡ります。町人地には、商家町としての名残がそこかしこに見られ、産業遺産とも呼べる醤油醸造関係の遺構も残されています。その一部である「たつの市龍野伝統的建造物群保存地区」は、東西約560m、南北約850m、面積約15.9haに及び、江戸から昭和初期までの多様な町並みを色濃く残していることから、令和元(2019)年12月23日に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。



龍野絵図:寛政10(1798)年

【現代にも生きる町割り】

龍野地区を描いた絵図の中で、最も詳細かつ最大のものである「龍野惣絵図」によると、この頃までに町人地の拡大が見られ、龍野五町の北側では畑地であった土地が宅地に、南側ではかつて武家地であった土地が一部を残して町人地へと変化し、揖保川の自然堤防の上にも町人地が広がったことが分かっています。

◆伝統的建造物の特性

- 保存地区内には、約250年前に建てられた町家が現存しています。
- 外観は、1階の表構え、2階の窓などに特徴があり、漆喰の外壁や板張りの腰壁、虫籠窓や出格子窓など様々な伝統様式の中に、蛇腹状の軒裏やガラス窓などもみられます。
- 町家の平面形式の基本形は、裏へ抜ける通り庭(土間)とその土間と平行して居室を配列したもので、居室を3つ並べる1列3間取りや、2つ並べる1列2間取りが標準的です。また、2列6間取り、2列4間取り、表屋造といった間口が広く規模の大きな間取りのものも存在します。町家以外の建造物としては、醸造業関係施設のほか、高塀を持つ屋敷型住宅、寺院、洋風住宅が存在し、町家を主体とする景観に点景を添えています。



片岡家(本町)

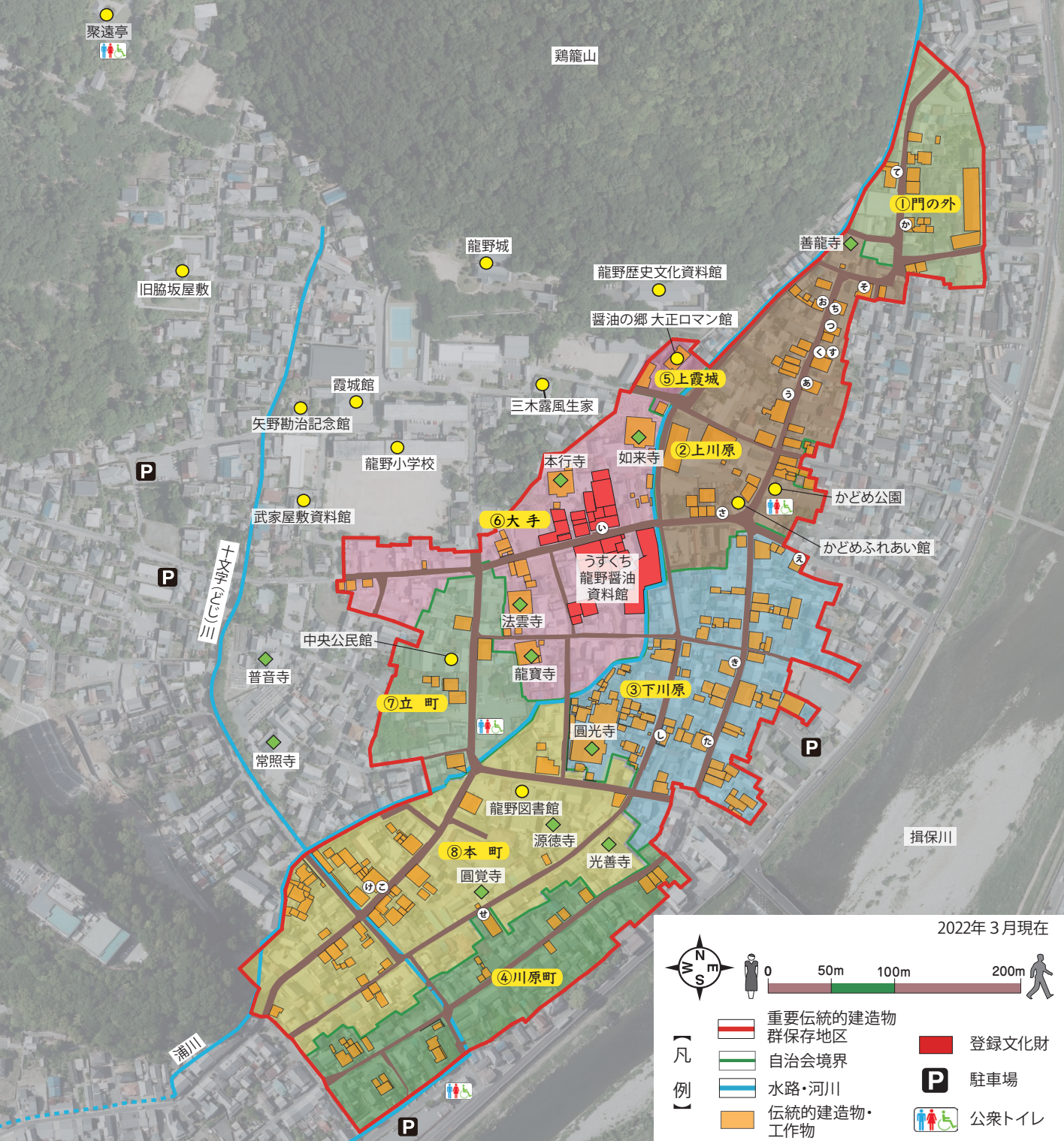


野村家(上川原)

◆地区の歴史

- 『播磨国風土記』には、相撲の祖とされる野見宿禰の墓が龍野にあることが記されています。墓造りのために人々が野に立ち並んだために「立野」と呼ばれ、それが龍野の地名の由来となっています。
- 龍野城下町は、鶏籠山に赤松氏が山城を築いた頃から形成され、文禄4(1595)年の水論絵図に家並みが描かれています。豊臣(羽柴)秀吉の侵攻後、短期間で城主が入れ替わりますが、17世紀前半には、山城の機能は山裾に移りました。
- 寛文12(1672)年、龍野へ入封した脇坂安政は、幕府の許可を得て山裾の平城を修築しました。これ以後、脇坂氏約200年の安定した治世が続き、龍野城下町は揖保川水運の要衝として、現在の地場産業につながる醤油醸造業や素麺製造業とともに発展しました。
- 寛文12年の絵図では、町家の数が330棟を超えており、酒屋、醤油屋など40種もの職業がみえ、多数の商家が軒を連ねていたことが分かります。城下町では、大きく分けて北西部に武家地が形成され、揖保川に近い南東部一帯に町人地が広がっていきました。
- 明治維新後、揖保川には橋が架かり、左岸では鉄道が通されるなど開発が進みます。一方、右岸の龍野地区は開発が進まなかったため、城下町として古い地割りや町並みが良好に残されました。

【たつの市龍野伝統的建造物群保存地区の位置図】



【それぞれの時代の情緒と風情がそのままに息づく、龍野の各地区】

① 門の外(もんの外)

寛文12年の文書に「御門外」と記された上川原の枝町で、善龍寺の東にはかつて惣門があり、その外という意味が地名の由来です。かつては紺屋(染物屋)が軒を連ね、地区の東には公用の馬繋ぎ場もありました。現在は、本市の地場産業である淡口醤油を製造する事業所があり、醤油の香りが漂う醸造のまち「龍野」にふさわしい景観のある地区です。



② 上川原(かみがわら)

揖保川河川敷に形成された町の北部に位置することが、地名の由来で、17世紀前半の文書には、上川原の地名が確認できます。江戸時代は、地区内を緩やかに曲がる通りに沿って、多種多様な店が軒を連ねる商家町でした。現在も町家造りの面影を残す建物が多く、本瓦葺きの屋根と塗籠の2階部分が特徴的な町並みです。近年は、古民家を再利用した喫茶店や美容室、書店なども営まれています。



③ 下川原(しもがわら)

揖保川河川敷に形成された町の南部に位置することが、地名の由来です。江戸時代初期は、酒造業、中期以降は、醤油醸造業が盛んな商家町でした。明治時代になると、乾物屋や豆腐屋などの日用品の商店街に変化しました。2階の外観に伝統的な町家の意匠が比較的良好に残っており、小規模な町家が軒を連ねる様は、城下町龍野の落ち着いた風情を今に伝えています。



④ 川原町(かわらちよう)

揖保川河川敷沿いに形成された町、つまり川原であったことが、地名の由来です。江戸時代には、町人地に武家屋敷も点在し、川沿いには商家が軒を連ねていました。また、龍野藩の儒学者の本間家、俣野家、藤江家が並んでおり、俣野氏の私塾「幽蘭堂」は、藩の内外の子弟が学ぶ庶民教育の場であったことが分かっています。屋敷型住宅や町家、洋館が散在する中に、高塀が連なる独特の景観を持つことが特徴です。



⑤ 上霞城(かみかじよう)

「霞城」は、龍野城が霞城と呼ばれたことに由来し、現在は上、中、下の三地区に分かれています。上霞城一帯は、龍野藩に仕える武士やその家族が住む武家地であり、藩政の中心地でした。また、大正時代に建てられた旧龍野醤油同業組合の事務所と醸造工場は、「醤油の郷大正ロマン館」として改修され、龍野地区の観光案内や地場製品の販売等を行っています。



⑥ 大手(おおて)

龍野城の大手門周辺に形成された地区であることが、地名の由来です。江戸時代から醤油醸造業が盛んで、タイルと石貼りの洋風建築の「うすくち龍野醤油資料館」は、ランドマークとなっています。また、大手には4つの寺院があり、通りから見る山門の風景と、その奥に見える本堂の大屋根の存在は、周辺の町家や土蔵造りの景観と相まって、落ち着いた歴史的な風景を作り出しています。



⑦ 立町(たてまち)

龍野城の大手門から南へ縦(立て)に延びる道筋にあったことが、地名の由来です。江戸時代には、小売業や両替業等を営む商家で賑わっていたほか、現在の中央公民館の位置には、町会所(集会所)が設置され、明治以降は、同じ場所に龍野町役場が設置されるなど、行政の中心地でもありました。伝統的な町家による家並みの中に、明治期に建てられた洋館が混在しているのが特徴です。



⑧ 本町(ほんまち)

龍野城の大手門から南下した位置にあり、城下町の元(本)となる町であったことが、地名の由来です。江戸時代には、今筋(現在の龍野図書館前の通り)から十文字川までの下町筋に醤油業者が集まる醸造町でした。土知川(十文字川)口に御番所が置かれ、日山村との境にあたる川原町筋交差点には門が設けられていました。十文字川沿いに連続する白壁の建物が美しく、豪壮な商家が並んでいることが特徴です。

